



TITLE:

# 近代日本農業思想史研究( Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

傳田, 功

---

CITATION:

傳田, 功. 近代日本農業思想史研究. 京都大学, 1966, 農学博士

ISSUE DATE:

1966-11-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/212039>

RIGHT:

【 334 】

氏 名	傳 田 功 でん た いさお
学 位 の 種 類	農 学 博 士
学 位 記 番 号	論 農 博 第 147 号
学位授与の日付	昭 和 41 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	近代日本農業思想史研究

論文調査委員 (主 査)  
教 授 柏 祐 賢 教 授 三 橋 時 雄 教 授 糸 原 正 信

論 文 内 容 の 要 旨

幕末から明治前期にかけての農村社会では、二宮尊徳によって代表せられるような人格と思想とをもつ人々が出てきて、大きな影響力をもつようになっていた。「老農」と称せられる一群の人々がそれである。そういう人々は、全国各地に出現し、その思想が農村社会に広くかつ深く拡がった。「老農」は、伝統的価値観を背景に、体得した独自の農業技術の普及につとめた。新官僚層も、農政の末端機構として広く老農層を活用した。明治30年代から、農業教育機関や農事試験研究機関が普及し、新しい農業技術が一般化するようになってくるが、それまでの「老農」層の役割は、極めて大きなものであった。本論文は、このような「老農」の思想と行動の展開を中心に、近代日本農業思想の発展過程を明らかにしたものである。

本論文は、まずはじめに、幕末期の伝統的な農村社会において、勤勉、節約、忍従、献身というような生活規範をもってする農業観が成立してきた過程を明らかにしている。そしてこのような思想が、家業や家庭の維持存続をはかる家族主義的伝統とともに、やがて新しい社会において、資本の分散を抑制し、さらに資本の蓄積を可能ならしめるようにはたらくことになったとしている。

ついで本論文は、このような農業思想が明治維新以降において、どのように継承され変容されていったかを、報徳社の指導者である岡田良一郎などの思想と行動を通して考察した。そしてその深い経験に基づく農民指導は、強い説得力をもつものであったこと、また特産農業の発展に大きく貢献したことなどを明らかにした。

もっとも報徳社運動の展開とならんで、西欧先進諸国との接触によって開かれた新たな農業思想が、学農社などを中心に見られるようになったことにも注目しているが、しかし、それが一般的な力となり、農業技術および農業構造の転換に大きくひびくようになったのは、明治後期以降であることを明らかにしている。

さらにまた本論文は、日本の産業構造の大きく変わる明治後期において、それまでの農業思想に大きな転換が起こってきたことを述べ、新たな社会観に基づく分配論中心の農業観も出てきたことを明らかにし

ている。

### 論文審査の結果の要旨

日本の経済思想あるいは農業思想に関する歴史的研究は、いままでも各方面からなされてきた。しかしそれらの研究の多くは、政策の立案者や学者などの論議の考察に限られていたり、あるいは個々の思想家の考えの分析で終始したりしている場合が多かった。この論文の提出者は、これに不満を感じ、現実の農業の歴史的発展の中で、思想のはたした役割や位置づけを行なわなくてはならないとし、新しい観点から思想を取り扱おうとしたのであって、従来の研究には見られなかった新しい成果をあげている。

論者は、地方経済の動きおよび農民生活の内面に入って分析し、それを動かしていくような主動力をもっていた指導者層に着目した。そして「老農」の思想と行動に、農業発展の主動力があったことを知り、それを一方では岡田家などの古文書によって、他方では当時の諸雑誌上に資料をさがし求めて克明に分析し、実証したのである。

そして、伝統的価値観を強くもった「老農」的農業思想が、すでに幕末において成立していたこと、そういう思想をもつ指導者層が、明治維新以降の農村、農業の発展の担い手となったこと、さらに明治後期になって、そういう指導者層の人格的指導力も漸次に後退していったことを明らかにした。

このように、本研究は、近代日本農業発展史上において、「老農」的農業思想のはたした役割を明確にし、多くの新知見を加えたものであって、農業思想史学および農業経済学の発展に貢献したところが大きい。よって本論文は、農学博士の学位論文として価値あるものと認める。